永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 16

戦傷病者として 16回の手術に耐えて

綾歌町　岩崎　森男さん

21歳の頃

太平洋戦争での戦闘や公務中に負傷や発病し、障がいを負った軍人や軍属らでつくる「日本傷痍軍人会」は、平成25年11月、創立60年を迎えましたが、会員の高齢化と減少により同日解散しました。「われらの後に傷痍軍人をつくるな」と平和を訴えてきた本会の解散は、日本が戦後一度も戦争をせずに済んだということにもなります。その一員としての父の生きざまを書き伝えます。

三原 久仁子さん（70歳）

昭和15年の冬、24歳の時です。

太陽が地平線から出て、地平線に入る河南省永城県付近の警備についていました。雨降りのぬかるみの農道を1日中歩きました。右足の靴下はすぐ汚れて翌日は履けないのに、左足は何日たっても汚れず、汗もかきません。水筒の湯で足を温めていましたが、良くならないので、野戦病院で診察を受けました。徐州陸軍病院に転入し、五人目の軍医の診察で初めて突発性脱疽と病名がつけられました。「この病気は歩いてはいけない」と言われ安静にしていました。

風呂上りのタオルも外にでると凍るほど寒い満州の寒さと、マラリアにかかって頭がガンガンしていても戦地に引っぱり出され、手当ても休養もできない無理がこたえたのだと思います。

2か月位、夜も昼も眠れず痛い所をじっと押さえながら、何度も死を考えていました。

「このままでは生命にかかわるから、内地で手術を受けるように」と言われ、広島、金沢、富山陸軍病院、東京日赤、東京第一、香川国立善通寺、高松中央病院と転々とし、3年半の長い闘病生活を送りました。

はじめは、左足親指に黒点ができたので、これを除くため昭和15年11月、爪の切開。治らないので、血管の接ぎ替えをし、血液の循環を良くするために左足大腿部動脈手術・左腹部神経手術、翌年8月には右足大腿部動脈手術、右腹部動脈手術、右腹部神経手術をしました。

しかし、血管が収縮して血液の循環が悪くなり、骨が腐っては欠けていきました。そこで、16年11月、東京日赤病院で、遂に右足の脛切断。しかし、骨が腐るのは止まらず、18年4月には左足も下脚切断。とうとう、両足とも鉄脚となりました。

そのため、12月に帰郷療養となり、翌年兵役免除となりました。

今振り返れば……。戦前に5年程、旅順で写真屋を仕事としていたために、初年兵時代から優遇され、戦地でも大事にされました。また、中国語が話せたので、帰順兵の教育の任にあたっていたから、生き延びることができたのです。写真屋の技術もなく、中国語の通訳もできなかったら、今頃こうして生きてはいなかったでしょう。

けれども、手足が不自由では本業の写真屋もできず、何をして生きていこうかと悩みました。「仕事はしたくない、できない」と言えば、それで通ったかもしれません。しかし、たった2年間の軍隊生活でしたが、その間に培われた軍人の精神と「帰っても絶対遊んではならん。社会のためになることをやれ」と軍医に言われたことが、常に自分を支えてくれました。

最初は何をしても失敗ばかり、そんな時は戦死した戦友たちの事を思い、「私には命が有るのだから」と自分に言い聞かせていました。試行錯誤の後、選んだ仕事が、冬でも体が温まるパットライス業でした。昭和20年4月から、妻の協力を得て始めました。

手動三輪車に乗り西山の近くで

35年間続けたパットライス業

その3年後再発し、善通寺病院で右足下脚を再切断しました。本義足になり松葉杖が無ければ歩行できなくなり、歩行できても松葉杖を握る両手指の色が変わって発熱のため、歩行困難となりました。手指は爪の下より化膿し腐骨となって欠けていき、その痛みとしびれに加え足の切断部の痛みとの闘いの日々。

昭和26年秋から、タバコの小売店の許可を得ることができ、店番ができるようになり、生活にハリができてきました。

翌秋、県より手動三輪車を支給され、これに乗って使い走りや商品の仕入れに走れるようになり、生活範囲が広がりました。

昭和44年、寒波に見舞われた冬、残っている手足が痛み出し、1月善通寺病院に強制入院となりました。そして、16回目の手術でした。左足の付け根から切断手術をし、左足は無くなってしまいました。無いのに足が痛む、動く、左足に悩まされ、絶対安静の回復室にいました。死生をさまよっていた時、4度目の奇跡が起こり、3年余の入院後、48年3月に退院。

それからは、リフォームした家の中で、車椅子の生活になりました。二本の足が一人前とするなら、6分の1人前、手の指は1本のみ健常。自分が生きていけるのは、いつも手足となって動いてくれる妻と、支えてくれる周りの人たちのおかげです。

今は戦後ですが、私の身体はまだ戦争が終わっていないのです。戦争さえ無ければ、こんなに手足を失うことは無かった。

絶対に戦争を起こしてはいけません。

※この聞き書きをして、父は1年半後に35年間続けた仕事をやめました。その2年後に心不全により、満65歳で不帰の人となりました。

54歳の頃、国立善通寺病院で

用語の説明

野戦病院　戦場の後方に、戦傷者を収容し応急手当を施すために臨時におかれる病院。急造のテントや民家で、外科の軍医が看護兵を指揮して治療にあたる。

帰順兵　敵対するのをやめて従った兵隊

パットライス　米などに圧力をかけた後、一気に開放することでふくらんでできる菓子。